

LIBRA SQUARE

Book 最近、おもしろかった本

『黙読の山』

荒川洋治 著 みすず書房 2,520円 (税込)

“呼吸に近い”短い文章、随所に鋭い指摘 作家や書物への愛情伝わるエッセイ集

本書は、詩人であり文芸評論家である荒川洋治の58編からなるエッセイ集である。

内容は、作家や作品に関するものが多いが、他にも仕事で訪れた旅先でのこと、言葉や書物自体に関すること、「書き文字」や本の題名についてのこと、文芸時評など多岐にわたっている。一つひとつの文章は短いものが多いが、著者ならではの切り口で書かれており、鋭い指摘が随所に見られる。また、作者や書物に対する愛情が伝わってくる温かみのある文章が多い。

表題作の『黙読の山』は、黙って本を読んでいるときには気づきにくい、漢字の読み方がわからないという内容のエッセイ。

最も印象に残ったのは、『国語をめぐる12章』というエッセイの『散文』という章。「詩」は、「個人が感じたものをそのまま表わすため「異様な、個人の匂いが」たちこめるが、「そう感じた人が確実にそこにいる」。

これに対し、「散文」は「つくられたものであり」、「本質

的に異常な因子をかかえていることを知っておく必要はある」と指摘する。

「谷間の道を、三人の村人が通る」という例文を挙げる。著者は、「散文」では「『谷間の道を、三人の村人が通る』というように知覚しなかったのに、誰ひとり」「谷間の道を」「三人の」「村人が」「通る」と順序だてて「知覚しなかったのに」、一見「理路整然」とした「文章が書かれてしまうということもありうる。それは不自然であり、こわいことだし、おそろしいことである」と述べる。

自分のエッセイを振り返って著者はいう、「読み返して気づく。みじかく簡素な文章がふえた。呼吸に近いものになった。何も書かない、白紙に近いものも、あるように感じる」（「あとがき」より）と。著者の近時の代表作として、他に『文芸時評という感想』（2005、四月社・第5回小林秀雄賞）がある。

（会員 仙石 隆）



『ガープの世界』

1982年/アメリカ/ジョージ・ロイ・ヒル監督作品

不条理な世界を積極的に生きる 母子の数奇な生涯を描いた「神話」

看護師のジェニーは、男のエゴに煩わされることなく母親となるため、ある大胆な行動に出た。こうして、ガープは父親のいない子としてこの世に生を受ける。後年、ジェニーは、自伝を上梓し、これが記録のベストセラーとなる。その結果、期せずして、女性解放運動の象徴に祀り上げられる。一方、成長したガープは、小説家として活躍し、幸福な家庭を築く。しかし、予期せぬ悲劇がジェニーとガープを待ち受けていた…。

本作は、母子の数奇な生涯を描いた「神話」である。

アービングによる同名の原作には、醜怪なものも含め、数多くの物語が猥雑に詰め込まれている。

監督のロイ・ヒルは、これを爽やかな語り口で描ききっており、見事だ。彼は、波乱に満ちた主人公の人生を、ユーモアを交えながら、肯定的に描いている。しかし、決して「一見悲惨な出来事の中に幸福が隠されている」あるいは「苦難の中にこそ学ぶべきものがある」といった安易な意味付けによって承認するのではない。ときに残酷な運命

を觀照しながら、その不条理に妙味を見出し、笑い飛ばしてみせるのである。その根底には、「不条理こそ世界の本質である」との覚悟めいた諦観が横たわっている。

本作で、この諦観をシニシズムから救っているのは、主体的に生命を謳歌することに対する共感と賛美である。全てを奪い去る悲劇が容易に起こりうるから、「何をなしたか（成果）」ではなく「どのように生きているか（姿勢）」が問われる。また、世界そのものが出鱈目に成り立っているが故に、主義主張は意味を失う。そこで求められるのは、主人公たちのように、不条理な世界を積極的に生きる内発性や主体性である。

先が見えない社会状況の中で、私たちは、賢明に振る舞おうとするあまり消極的になり、また、不安から排他的になりがちである。このような時世においてこそ、本作の潔い世界は輝きを増す、と私は思う。

(会員 儀間礼嗣)

『ガープの世界』DVD
価格：2,100円(税込)
発売：ワーナー・ホーム・ビデオ

